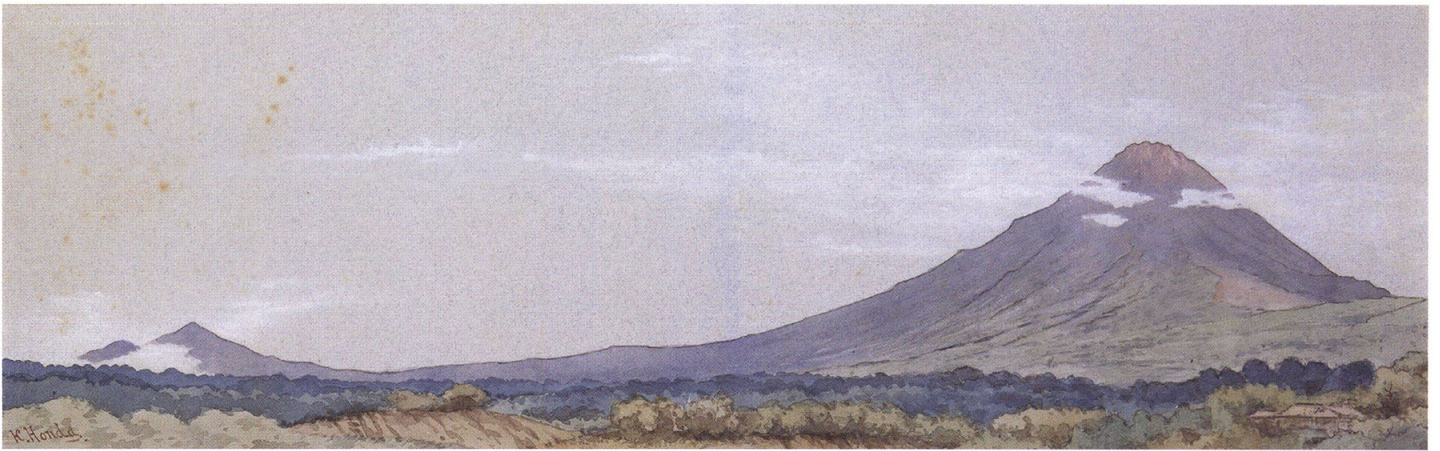




佐々木道介 富士山頂ヨリ北方ヲ俯瞰スル図



本多錦吉郎 駿州駿東郡竹ノ下ヨリ富士及愛鷹山ヲ望ムノ図

23 富士山図

佐々木道介・本多錦吉郎

一帖

明治十九年（一八八六）頃

紙、水彩

各一六・七（三四・六×二〇・八）六〇・七

明治の初め、描写対象を客観的かつ正確に写し取ることでできる洋画は、写真の領域とも隣接する実用的な技術として日本で導入された面がある。そしてその技術は、武器の設計図や工場の建築図面の製図はもとより、敵地の地理を迅速に測量し正確な地形図を作成するためにも必要不可欠なものであったことから、陸軍省には地図課、測量課が設置され、陸軍士官学校では図画・図学が教えられた。

本作を描いた佐々木道介（一八五〇～一九〇七）、本多錦吉郎（一八五〇～一九二二）はいずれも陸軍士官学校で図画の教鞭をとっていた洋画家である。両者は、明治十九年（一八八六）に伯爵亀井茲明の命を受けてこの画帖を制作した。画帖の序文には、従来の富士山を描いた絵が「いずれも白い扇を逆さにしたような定型ばかりであることから、実際に二人の画家を現地に出かせ写生させた。そうして描かれた『真形ヲ得タ』写生図の内、優れた図を選んでまとめたのがこの画帖であると記されている。

画帖には、富士山が裾野を長く横へ横へと広げていく姿を夔則的な横長の画面に描いた遠望図や、山頂から眼下に広がる雲海とさらにその下の地平を俯瞰した図、また激しく切り立った山頂の剣が峰の景色など、現地で写生したからこそその実感をともなった景観が、水彩によって非常に写実的に描かれている。

十メートル先の岩塊、百メートル先の崖、そしてはるか彼方の遠景と、様々な遠近表現が破綻することなく描かれ、まさに自分の目でその景色を見ているように感じさせる描写は、おそらく佐々木と本多が習得していた西洋の測量法を駆使したことによるものだろう。図中には小さく朱書きで数字が書き込まれており、その数字が記された場所の名称が画帖の巻頭に鑑賞の手引きとして記されている。まさに優れた写生技術として洋画が活用されていたことが理解できる作品である。



本多錦吉郎 富士山頂ヨリ西南ヲ俯瞰スル図



佐々木道介 富士山登道須山口六合目ヨリ宝永山ヲ望ム図



佐々木道介 富士山北口登道六合目ヨリ山頂ヲ望ム図

- ・各展覧会図録中，作品名や作者，制作年などの表記は，図録発行当時のものです。
- ・三の丸尚蔵館の展覧会図録の著作権はすべて宮内庁に属し，本ファイルを改変，再配布するなどの行為は有償・無償を問わずできません。
- ・三の丸尚蔵館の展覧会図録（PDF ファイル）に掲載された文章や図版を利用する場合は，書籍と同様に出版を明記してください。また，図版を出版・放送・ウェブサイト・研究資料などに使用する場合は，宮内庁ホームページに記載している「三の丸尚蔵館収蔵作品等の写真使用について」のとおり手続きを行ってください。なお，図版を営利目的の販売品や広告，また個人的な目的等で使用することはできません。

明治美術の一断面——研ぎ澄まされた技と美

三の丸尚蔵館展覧会図録 No. 82

編集 宮内庁三の丸尚蔵館
制作 株式会社 東京美術
翻訳 黒川廣子
発行 宮内庁
平成三十年十一月三日発行

© 2018, The Museum of the Imperial Collections, Sanmomaru Shozokan